

## 『ブドウ園と農夫』のたとえ

2022年04月21日

「その人には、まだ一人、愛する息子がいた。『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、財産はこちらのものだ。』そして、息子を捕まえて殺し、ぶどう園の外に放り出した。」(マルコ福音書 12章6節～8節)

エルサレム神殿当局は、「宮清め」の暴力事件を神殿への侮辱と激怒し、主イエスに何の、誰の権威によって行ったかを問い詰めた。主イエスは、ヨハネの洗礼は天からものか人からのものかと逆に問うたが、作られた権威に寄りかかる彼らは、自分の言葉を持っていなかった。答えられない彼らに「私も言うまい」と言って、問答を終えられた。

この緊迫した問答の後、主イエスは彼らに「ぶどう園と農夫」のたとえを語られたと続いている。しかし、このたとえは主イエスが語られたものではなく、十字架と復活を経験し、イエスをキリストと信じる教会が誕生したことを知っているマルコ福音書の著者の信仰告白として読むことが適正と思われる。たとえば下記のようなものである。

ある人がぶどう園を造り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを建て、万全を整え、農夫たちに貸して旅に出た。収穫の時になり、主人はぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところに送った。ところが、農夫たちは僕を捕まえて袋叩きにし、何も持たせないで帰した。そこで、他の僕を送ったが、農夫たちは僕の頭を殴り、侮辱した。更に、別の僕を送ったが、殺してしまった。その他に、多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。主人には愛する一人息子がいた。「『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、財産はこちらのものだ。』そして、息子を捕まえて殺し、ぶどう園の外に放り出した。」このたとえはぶどう園の主人は神、ぶどう園はイスラエルの地、農夫はイスラエル人、僕は旧約の預言者たち、一人息子は主イエスである。神はイスラエル人を愛し、篤く保護した。神はイスラエル人に感謝の信仰を求め、預言者たちを遣わし、神への信仰に生きるように諭した。ところが、イスラエル人は預言者たちの言葉を聞かず、迫害し、殺した。神の独り子イエスなら聞いてくれると思って遣わしたが、独り子をも十字架で殺し、捨て去った。怒った主人は農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人たちに与えるに違いない。神殿当局たちは自分たちの殺意を、当てつけたたとえと気付いて、捕縛しようとした。けれども、主イエスを支持する民衆を恐れ、捕らえることができず、主イエスをその場に残し、立ち去ったと、神殿当局者たちとの争いを記している。

その後、「家を建てる者の捨てた石／これは隅の親石となった。これは、主がなさったことで／私たちには不思議なこと」とつなげている。この言葉は、最高法院でペトロが、「あなたがた家を建てる者に捨てられ／隅の親石となった石(使徒言行録4:11)」と証言し、また、Iペトロ2章7節に、「家を建てる者の捨てた石／これが隅の親石となった」と書かれているように、不要として捨てられた主イエスの死によって新しいキリストの教会が建てられたと信じた初代教会の人々の信条である。著者は、主イエスの十字架が親石になって、教会が形成された不思議を書いている。だから、これは主イエスが語られた言葉ではない。イスラエルは紀元70年に滅び、ローマ人が支配したという譬えであろう。旧約聖書の歴史、主イエスの十字架の死、イスラエルの滅亡を譬えている。